野馬土手（土手際遺跡）

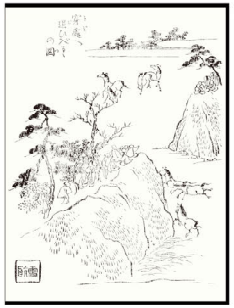
江戸時代、船橋市域の広大な台地上に野馬を育てる牧があり、ここ二和や三咲の地は小金下野牧の一部でした。牧の所有者は江戸幕府でしたが、実際の管理は牧士に率いられた牧周辺の村人によって行われました。村人の仕事は、牧と村の境の野馬除土手や野馬堀、勢子土手を築いたり、修復をしたり（土手普請）、牧場内の泉や池の水が日照り等により水が涸れた時に水を運んだり（野馬水汲み人足）、一年に一度野馬を集める野馬捕りの勢子人足など、多岐に亘りました。

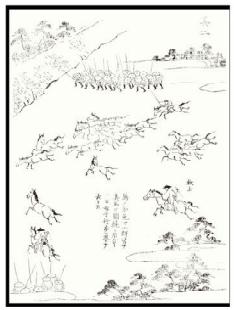
この土手は勢子土手と言い、牧内に築かれ、野馬捕りに利用したのもです。勢子とは野馬捕りに参加した村人を指しますが、勢子が追い立てた野馬はここより北に位置する大込（今の咲が丘一丁目他）内の下野牧捕込に入れられ、新生馬には焼印がおされました。また払い下げ馬とそうでない馬を分け、そうでない馬は、再び牧に放されました。右上は、初代広重による「富士三十六景 下総小金原」（安政5（１８５８）年）の浮世絵です。右下は、『成田参詣記』（安政5（１８５８）年刊行）の川嶋雪航（佐倉藩の画師）による挿絵で野馬捕りの様子や、土手の上には見物客の姿が描かれています。ここ二和の野馬土手を描いたものと、言われています。

牧は明治に入ると廃止となり、一部は開墾されました。開墾された順番と縁起の良い文字を組み合わせて、初富（鎌ケ谷市）・二和・三咲・豊四季（柏市）五香（松戸市）…という地名が付けられました。

船橋市教育委員会

「富士三十六景 下総小金原」
初代広重画（安政5年）西図書館所蔵





「其の二　穿処へ追い入るるの図」
『成田参詣記』川嶋雪航画 西図書館所蔵